

手指の爪から分かる『病気』のサイン(信号)

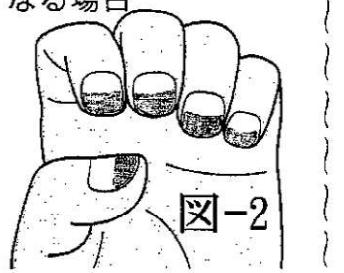
勝岡憲正(北里大学主任教授)

H.24年12月、願成寺

図-1.爪(つめ)の構造



●根元側半分が白くなる場合

慢性腎不全の場合には、爪の根元側半分が白くなり、上半分は茶色っぽくなるのが特徴(とくちょう)。

●爪甲横溝

図-5

写真で横線のように見える部分が溝。この溝は爪が伸びるにつれて先端のほうに移動するため、爪の根元からの距離で病気によって障害されたおおよその時期がわかる。

◎爪は皮膚の一部で、両手・両足の計20個の爪の全面積は皮膚全体の約500分の1です。が、この小さな爪に様々な病気のサイン(信号)が現れたりします。内臓の働きが悪くなると、手足の細い血管が詰まったり・血流が悪くなったりします。すると、爪に変化が現れて来ます。

- 爪は毛髪と同じタンパク質(ケラチン)でできており、指先を守り・指に力を入れる時に指先を支え・物を掴んだり、歩く時、指先に力を入れられるのです。

図-1に『爪の構造』を示します。

- ①爪甲=半透明で、下の皮膚の色が透けて薄い桃色に見えます。
- ②爪半月=爪甲の根元の白っぽい半月状の部分です。
- ③爪母=爪甲の根元あたりにあり、皮や爪甲に隠れているので、外からは見えません。

★爪の色・形・質の変化により疑われる病気!

- 1.爪が全体に白くなる時=肝硬変・肺ガン・白瘍病などが疑われ、肝硬変では手の平が赤くなったりします。

- 2.爪の根元側半分が白くなり・爪半月が見えないか、上半分が茶色の時=慢性腎不全の疑いがあり、爪が伸びても白い部分は爪の先へ移動せず・位置も変わりません(図-2)。
- 3.爪が白くなるのは、爪の下の皮膚の血流が悪くなったり・老化・鉄欠乏性貧血・栄養失調などです。
- 4.爪に茶色や黒の線が入る時=糖尿病・リンパ腫などや、指先の細い血管にバイ菌が詰まつての出血です。
- 5.爪が丸く盛り上っている時=肺の病気・肝硬変などで、全身の血流が悪くなり・ムクミが生じたりします(図-3)。
- 6.爪が薄くなり・へこんでサジ状の時=鉄欠乏性貧血・慢性胃腸炎・ビタミン欠乏症などで、爪の栄養障害により爪が薄く・外側から圧迫されて、へコムようです(図-4)。
- 7.爪に横線状の溝が入る時=慢性腎不全・糖尿病・痛風などで、爪母の障害で爪に横線が入ります(図-5)。
- ※爪の変化に気づいたら、受診しましょう。